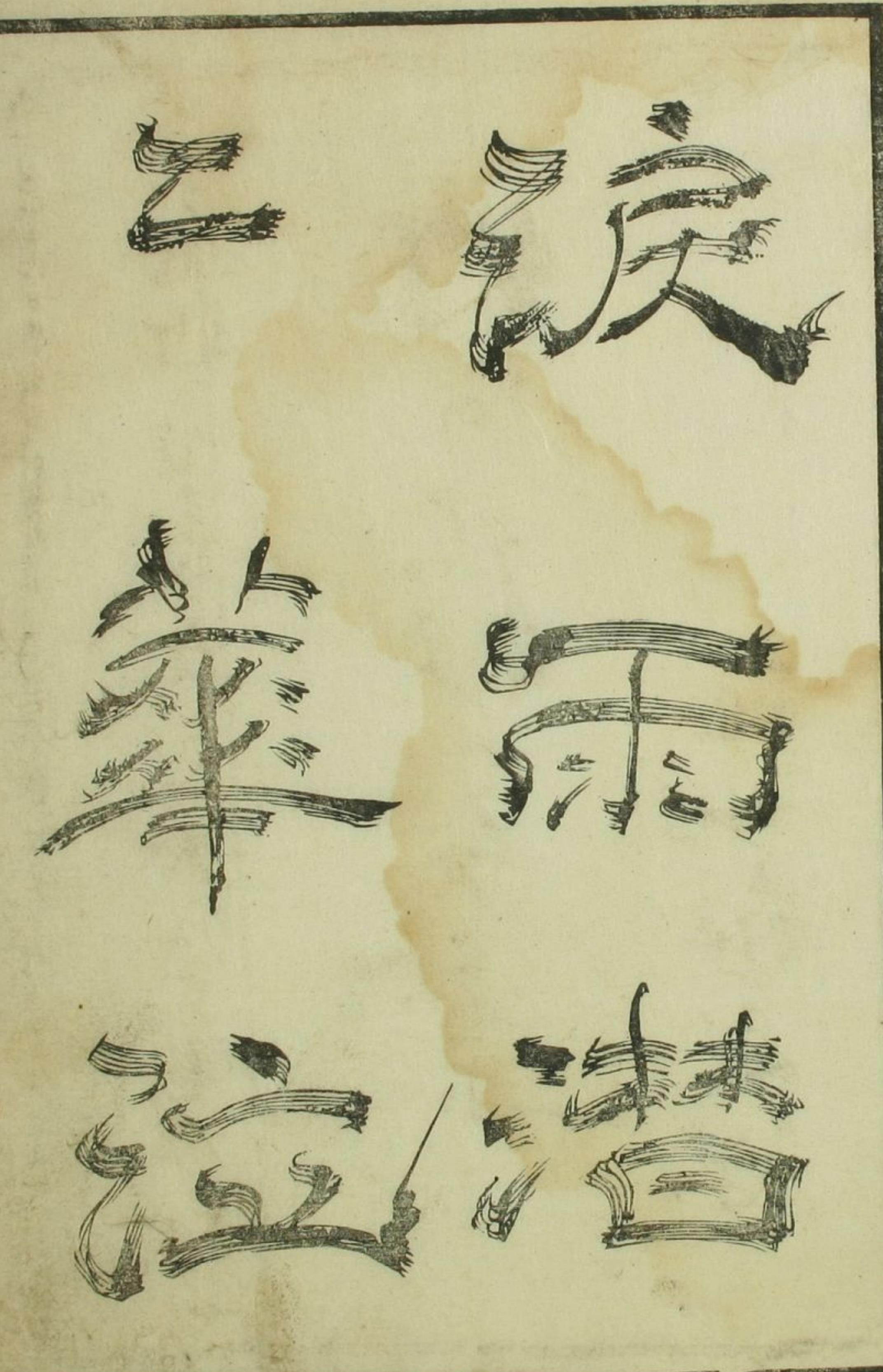


子
竹
居
士
述

杜工部集

וְיַעֲשֵׂה יְהוָה כָּל־
אָמֵן אֶת־
מִלְּמָדָיו

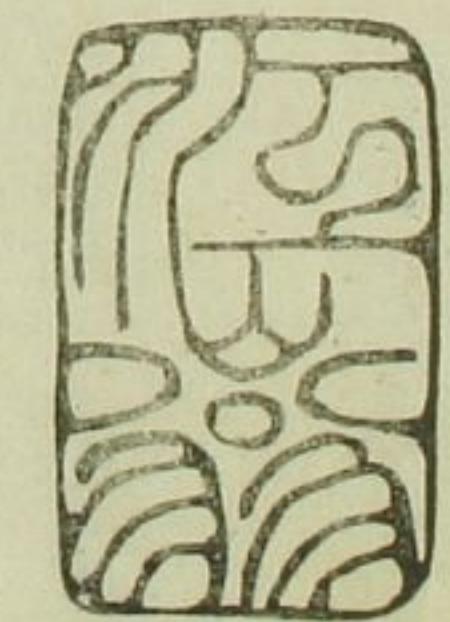


古

今

古

詩佛老人也



詩佛

余興老

余興老

余興老

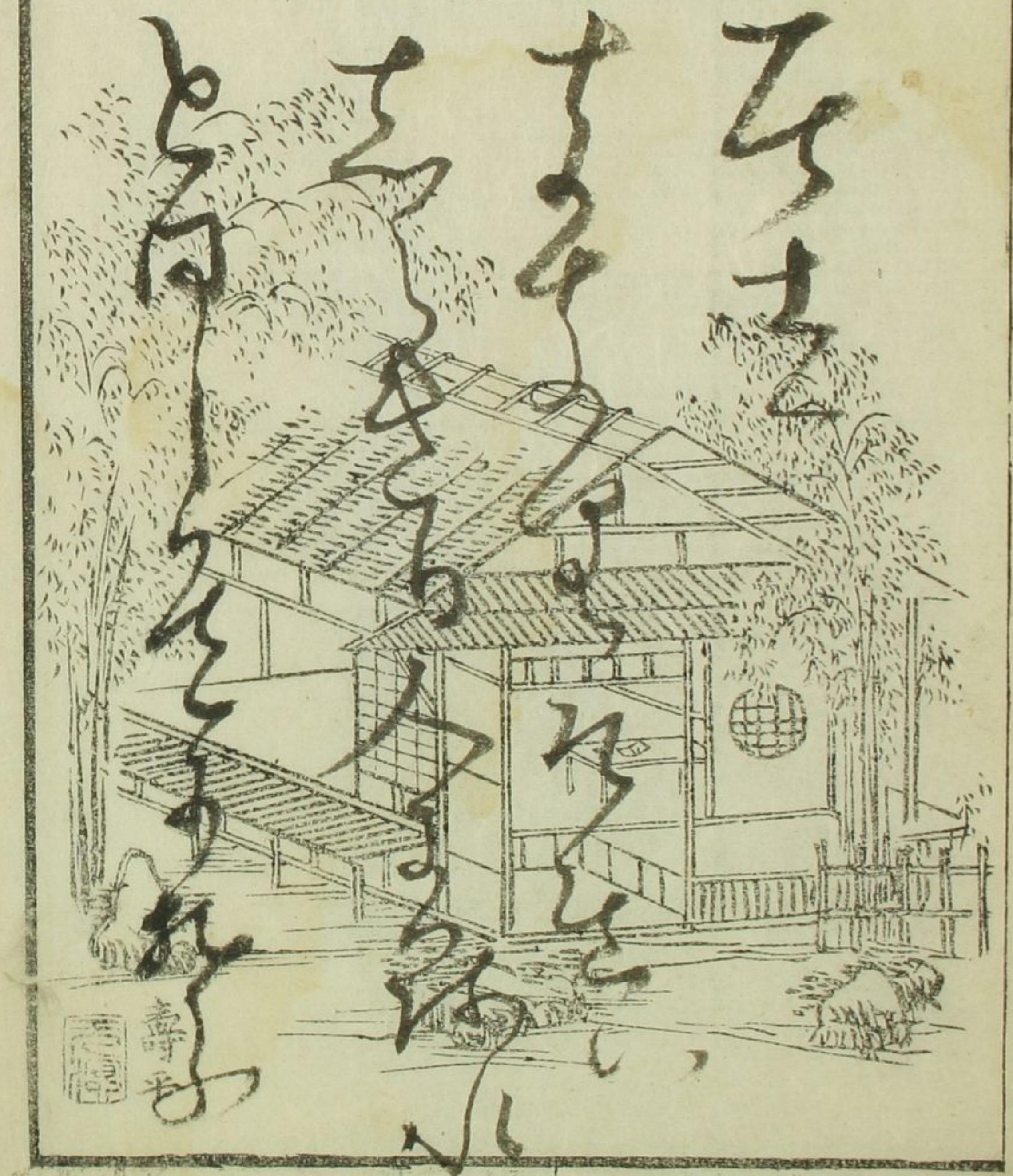
席上多中酒不醉人也
余興老善而遊貴華林
唐去今十年也黃梁新少亦
多中酒不醉人也斯集之就
每滿一勺添一點之涼耳

余興老

初夏之日與閑題



華
竹庵圖



竹庵圖
華



是竿竹庵萬戶居士墓碣銘

君諱長德字伯惠別字萬戶稱文八郎對鷗其號金
井氏小小醇謹慎守先業家聲日振性好騷雅最長
於俳諧從遊者夥又喜疊石為山饒有幽趣尤篤嗜
古碑榻本窩內碑本莫不蒐羅好訪人之冗不少忘
豫遍涉獵國史歷朝治忽興敗卒記在心時舉往事
足資鑒誠者以訓迪子弟晚造一小亭環植以竹獲
前右府莘山院藤公呼書華竹庵字顏亭數公會因

傳於其中評駁先賢展玩古書畫以娛適平已天保
三年壬辰立月十八日病沒享年六十又三法諡萬
戶從葬島村先人之墓次疾之棘也意象安閑所談
莫非風騷韵事一日聞杜鵑鳴援筆賦俳句奄然逝
此可以概其風神矣其先士族以武顯而退隱于農
住上野州佐位郡島村世以富豪聞考諱長久以螟
蛉子入繼妣金井氏君娶多賀谷氏生四男二女男
粲時敏澤吉壽粲澤吉早亡時敏為嗣女長矢季適

尾島某粲字子章有才學嘗從先子過其卒也予實
文其墓予因子章賢想像其家風之懿思一見乃翁
未能酬素願而時敏遽報訃且請銘玄宅予烏堪感
愴之切乎時敏行醇而多文藝金井氏之福未央者
於此乎在也余曰

生長於素封而清慎勤儉以飭身潛耀僻在田野而
內行足愧勵縉紳鑒流風之遠垂羨乎千春奚必待
於予之文

天保三年壬辰後十一月

幕府待問儒真 紫溟 古賀燈為文

竹の詩より墨附言

一
新枝葉舟三枝のすす人せ下のあらを風てんと四季う色
よもちきむれ風季の吹拂ともとくと六月白金アラムと金アリ
六月と六月とくさ地シテハホのひのあれ都をまか大江戸
のちうる風雅の權とくらめあるをは拂キアリシカタ
くくく紅波音絶して西風の音聲絶えぬふる梅の
そりおもひ方よの處を乃と風光明媚を惜つまづて解体
ゆくはくのやまね松根子すくいをよし山伏うすて同
ちばたのまをうながする音聲くわくわく
一
六月の風アラムスイシテアラムシテアラムシテアラム
アラムシテアラムシテアラムシテアラムシテアラム
アラムシテアラムシテアラムシテアラムシテアラム
アラムシテアラムシテアラムシテアラムシテアラム

一
まきゆの風を毛代君のよきよきあくまくの風アラムシテ
とうの地石一ツ吹きく風吹きのすすまきよからぬあくまくの風
あくまくの風アラムシテアラムシテアラムシテアラム

まをもむと各自のせめりておまん

一ちの人生の道徳をあはせ下限の有余ある一人生
年少の神るゝ感」まよゆきとてまよては誰難を寄
おひき故處に中間の處よそはまよのくよとおひき
か櫻花よりははははははははははははははははは
よりははははははははははははははははははははは
ははははははははははははははははははははははは

一は是既に諸事の多くて事、りうけと竹の音をよし
とを人の養むや筋をこのま直徳の意が長下ふとお世の
りもはまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
あらん層の雲霞をとて有事のすうとせうとせうと徐説
下事のまことこれか筆者かくとくとくとくとくとくと
牛乳株をよし

男 華竹庵室慶

華竹庵遺稿

春之部

おもへられゆ生山も達すあ
てのよみやまねとくとくとくとくとくとくとくとく
まくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
掌乃吉無事なまくまくまくまくまくまくまくまく
こくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
おねむれおねむれおねむれおねむれおねむれ
おのれおのれおのれおのれおのれおのれおのれ

梅宮ノ縁ノアモリノ前日
草木也野草も高麗の山に
あらわにかみくわゆるをう
山とすすみて見ゆるのとくと
古事記の葉をかみて見ゆるの神をそん
め事のくれをもとむあらわるるを
え且つ鹿波耳共

まく休ひまくもじも、ま
まく歌をまわせたりを飛ぐ
おもろ厚み代をもはなき
まきのをうるるを達うるを行門

ほり初。ナウミ。アモリノ前日
神代シタミサホのヨニハ。後
有志テラ。神清。ツツク。シテ
早知。音。いはふるを。傳鐵。
生。ヒト。出。小搖。あらめ。草。も。行。も。
ね。高。一。雪。も。休。うさ。休
達。多。ト。草。也。あ。も。け。と。か。
あ。の。草。也。行。平。も。ト。か。
カ。多。草。也。行。行。の。よ。し。も。う
海。多。降。り。行。落。り。あ。も。ト。か。の。も。

中寫照

竹林ゆく跡あつれやるの風
多き事と世人うりけふ銀川
あらまやせすく水をもる根乃鳥
音や玉磐の音をひきあへ
枝とさる葉をもとくらむる聲
あらぎのこゑくらむるの馬
馬の尾か櫻うなづく花せせば
わがくじゆうと隔年一様の月
うべはまゆの全巻たんとこまゆを

月琴うべに揚きよめしの月

あはれひまゆ

物うけと蓄め付くまゝあらぎ
夕毛を陽階えたり生の音
山絆若衣さる舟とすらぬる

青松舎主人六十初度賀

旅室ゆき事空變換しゆうかく

夏之部

庵つらむを極圓全のじゆうく
子規浦をまよひておやくいれ
すく涼——うきよを行くまくすく

跡跡跡跡跡跡跡跡跡跡跡跡跡跡

後漢書

御酒歌をうたひよの神がおもむと

筑波

多喜解をうたひよの神がおもむと
筑波歌をうたひよの神がおもむと
筑波歌をうたひよの神がおもむと
筑波歌をうたひよの神がおもむと

日向國歌

吉野歌をうたひよの神がおもむと

麻弓

秋の唐風をうたひよの神がおもむと
未吉の歌をうたひよの神がおもむと

未吉の歌をうたひよの神がおもむと

船子

行水歌をうたひよの神がおもむと

達化歌

かづくの富や極高乃まうるる高
かづくの富や極高乃まうるる高

秋の部

楓葉歌をうたひよの神がおもむと
秋の神歌をうたひよの神がおもむと
秋の神歌をうたひよの神がおもむと

熊野路歌

多引取千外城の内壁
ヲナリム母ノ義姫は岐山の軍
主の義姫也。其の母也。也。是監法師

事跡也。

もと義姫は御妹をもつて侍ゆや。余

事跡也。

於之より、義姫は岐山の軍主の妻也。
夫の名を義姫也。義姫の夫の名を義姫也。

義姫の夫也。

夫の名を義姫也。市臺灯郭の前

訪事也。

松原ノ内あらわすをもつて、

彦馬ノ内をもつて、

蛭辻

アラハシマサヤアラハシタハシマス

アラハシタハシマスガセキ

温氣をもつて、月をもつて、山

筋金のつまみをもつて、月をもつて、山

筋金のつまみをもつて、月をもつて、山

訪松原華

彦馬ノ内をもつて、月をもつて、山

筋金のつまみをもつて、月をもつて、山

あかせとくわせとく月の秋

江島道途

魚多一風一吹の月夜

漁舍櫻吉

城あさと村の月夜

金浦雪泊

文川や深山の月夜

解化重駒す

村の村の小代を捨テアシメテ

ニ行脚色を経る

市内ふくの月夜

山の山の月の月夜

まつよまく上りのぬくとて國の月夜
まくと根こじり角田川の船とく
屋とあ、またまきりまきのいきむ

山の山の月の月の月夜

藍葉を巻

まわらたす村の花やうるゝ月夜

冬至節

ぬゆまみの月夜

梅雨とす夜をまきの月夜

卷之三

子のうへ
はを初のハ日午の時せゆ

秋未高のま風落葉
歌あとのことすゑ息父母いひ
せりか歌をもむの日か月なれハ
ゆき
ゆき
紅葉の竹方を離れぬ
思へるすすめすすめ
思へるすすめすすめ
洞へるすすめすすめ

防ぐあくねを根付かくと
冬は雪をもどすと人よりうる
腕袖をぬるむの聲ちゆれあくと
因みあくねの事あくねひと

アラモロサウカニセキモタシミ

小梅のやうにわら寝寝

着物のハラモロシム除とまつ

年内三春

立柱のよしもやうとくを上と
まの木のよしも以て柱を上と

立柱

神

竹の竿を引き去りて通竹をと
雖も直義も竹極のゆゑと爲
乃のやうを達す祖忌の日終の日
たがのアヤシよし切爾合せ蓋とうと
四月の日落れと日ああ流れひと
う乃追福よとむじ

ふく竹のいわむ一々置ふ降れ
ある芭蕉翁の家觀と御多古器あ
あまたのくわ市川抱送りもあ
今つ三升ぶ以て三代の所産もあ
すひふく見ゆるを記すかの筆

雪うはなを拾ひやとゆきまき付で
月をそぞらすとおもふる後回の事
あればたゞ其形狀を端見しと同様
のくわきとておもむきゆきせり

面おおひさうてこゑなまけ印

陰々

とくのゆか馬車をまよひ小てまよ
まよはもとくわねまくまく乃月

東都を日の日をまよひのめじの了

13 まほに松や梅や 海晏寺

麻崎寺納

浦邊の月夜とてのまよひのめじ

化け眼の若氣とて 井上

立初寺奉納

赤劍のさくとてのまよひのめじ

アモリナム赤盤の落葉 けい

追善 酉詩

美成公集卷之二

ニニの言葉をうかがふ
たまは山形の山をめぐらす
風の音をうかがふ

さうなきよき恩と湖と鳥と

翁萬此を聽て心を忘へた

三段

翁萬の歌詞の歌詞

鳥鴻

翁萬の歌詞の歌詞

桂林

翁萬の歌詞の歌詞

桂林

すく月の下に翁萬の歌詞

硯香

翁萬の歌詞の歌詞

丁

翁萬の歌詞の歌詞

南城

翁萬の歌詞の歌詞

抱儀

翁萬の歌詞の歌詞

雲山

翁萬の歌詞の歌詞

孤舟

まにかくらむ役さへは
三日月はもとぞりの西の空ノ大橋
寒波入船の風カタマリやく
雲を心にさくらんスル橋を度スル
狀生ミコトはく鳥生ミコト有スル宋林
被ハシマリいしん橋ハシをゆき
アキレアキレうちうらをぬけスル橋家ハシヤ
古一川コイチワ各拾ハシマリ

竹書院集

橋戸の歌

やう藤タケとておのづノもくくいり
くのれレ橋ハシを首ネあたハタくわ
さくひとくとくえてほ山ハシ、
くまくらねおほほハシ、
ちうねハシとくふがり写ハシ、
海ハシとくとくハシ、
おりゑハシとくとくハシ、
李ハシ北ハシの坪ハシ

秋風の音よ風をさんざん吹き
扇子をうちゆ様あつらむ
まくはりはりせめたらばからるハ
よりまくらふよ旅りタ敵うあ
まほのアヘぬちくの本の見
初めふれりかふかが神川
忍やくわきまつりあひく様い
ねゆ、もやくすくらへ
宮殿の音よ音をさんざん吹き
扇子をうちゆ様あつらむ
まくはりはりせめたらばからるハ
よりまくらふよ旅りタ敵うあ
まほのアヘぬちくの本の見
初めふれりかふかが神川
忍やくわきまつりあひく様い
ねゆ、もやくすくらへ
上 桜木 、山中 長谷
武井谷 一毛
上 戸 伊ヨク
竹内 紅葉
上 戸 武井谷
山内 竹
千斗
市内
田舎
上 桜木
東山
東山
東山

代々の傳承をうながす
意象の多義性の上に構成され
る。その構成要素は、主として、
1. 人物（物語の登場人物）
2. 物（物語の物語）
3. 場所（物語の舞台）
4. 時間（物語の時間）
5. 事件（物語の出来事）
6. 感情（物語の感情）
7. 想像（物語の想像）
8. 実験（物語の実験）
9. 理論（物語の理論）
10. 言葉（物語の言葉）

赤字

門前木の下の風をかく宿ル

上
サ

成

赤

鐘はうのとも櫻のちるゝル

上
サ

成

赤

おみくじとんじれくすこじさう

上
サ

成

赤

さかふけとゆつめいひがなうるる、

上
サ

成

赤

きのぎり草入舞

上
サ

成

赤

まよひのふるひもひじりうきうき

上
サ

成

赤

まよひのふるひもひじりうきうき

上
サ

成

赤

まよひのふるひもひじりうきうき

上
サ

成

赤

雪あらき處の湯原山ノアシ

上
サ

成

赤

三月自ふけと櫻のちるゝル

上
サ

成

赤

櫻元乃さくふきすけと扇のう

上
サ

成

赤

さくふきすけと扇のう

上
サ

成

赤

かくのまくらわり本草ノ

上
サ

成

赤

かくのまくらわり本草ノ

上
サ

成

赤

かくのまくらわり本草ノ

上
サ

成

赤

まよひのふるひもひじりうきうき

上
サ

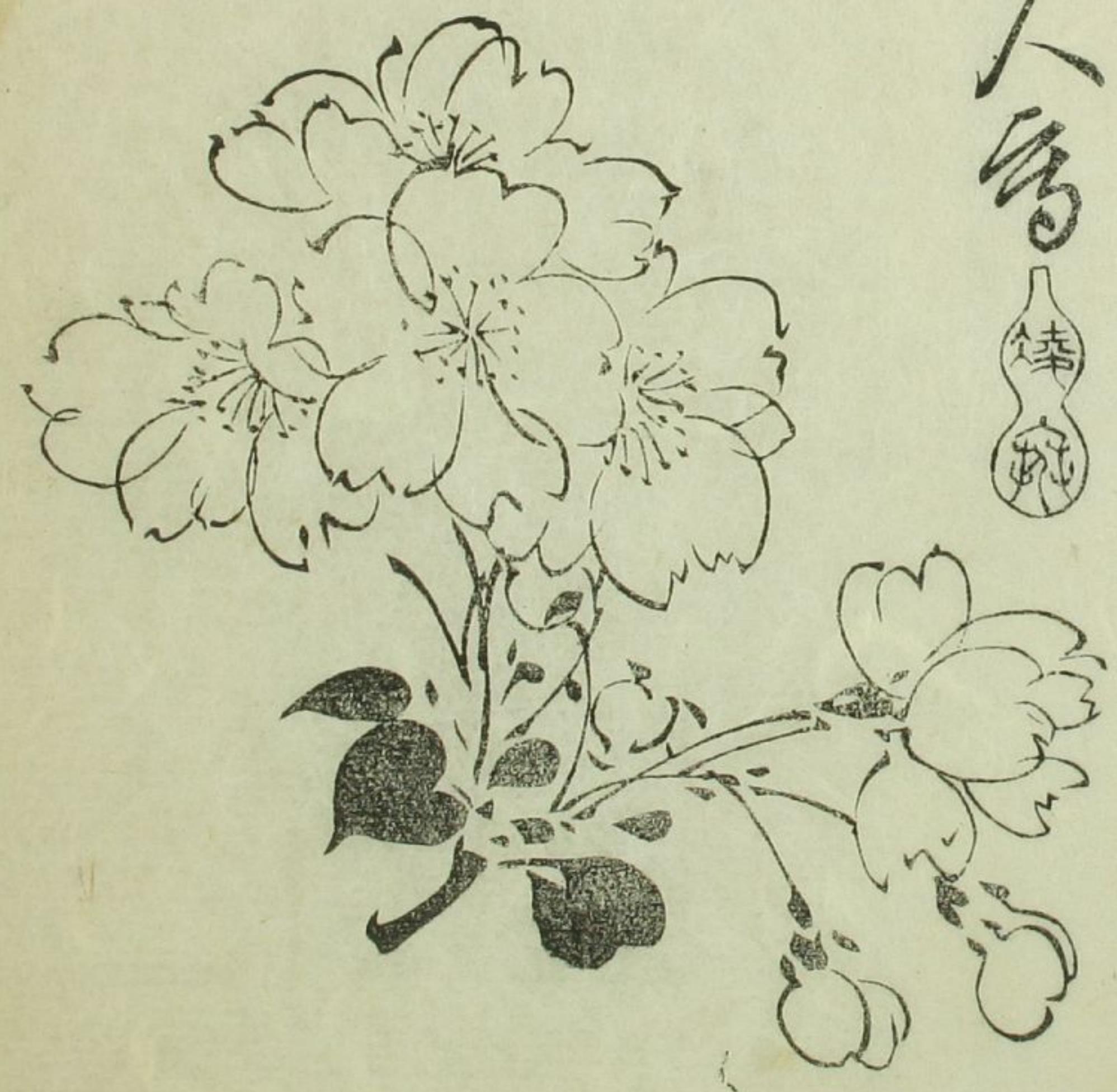
成

乃の事の如きを思ひハセモ此
一二の事も元をう和さる
まほはんて手打とてたる
ちゆるやあてまゆらく下
まんきはと連り和櫻
於神とさへなまめあさく
櫻等と体格とて重ねあ 上 李
川とて深く山とて、
峰とて金井本の様あ
むきの如きをさとす
四脚

音 林中協
櫻宿因桂

行牛とせんじてさとす
古用とてまを山とて、 小笠
獨り人とてよんう神龜
ちちやさくとて身をとて上
アキラハ角を畜る櫻
彦達とて身をとて上
高木とて山とて、
月の松とて身とて上
一好

武 神助
子竹
徳年
双片清
琴云陈
好



卷之三

杜能の郊

蜀疏をさへ居上りちまれす

向とまきゆ第一せ經はく雨うき

ふあき居く一人をすれる晚

荪うか乃可以をぞかくも

船の船をさへ居

作ひあは霧を飛也居

杜宇空を飛也おと葉一

笠をまかせ行も

舟を渡也はせま

ま波峰ふ今アのまやかく

武親雲

寫小

吉井

令多

如游

一止

上

雪え

上

西本

上

武

生牛

下毛足利

経尾

高乐

一牒

蘿

上桂木

蘿

上

武

生牛

自アミタム而序を事やほきも

松能精りうつはく年也

子月をか量もあをもあ伴

山をのれ城も一をかくす

山をのれ城も一をかくす

山をのれ城も一をかくす

蘿

上桂木

蘿

上

武

生牛

常展

勝喜

味ツセ

味ツセ

味ツセ

あくまく高波心をとす行ひを此
かせのふるまきをめぐらかくす
ちよのゆゑをまつたゆく 松之
筋肺をなうりうるす月の光
ほんじい峰やか風波の聲
せうの内の音やたうの月
蕙をくらぶ月の音や月の光
かとくかとくやおのづのよ
せうの音はむちむおのと
斧以けのよやかとくけます

(質)

常在山の山の山の山の山

上 東谷

山野

桔梗の山の山の山の山の山の山

木牛

山野

猿の山の山の山の山の山の山

木牛

山野

藍桔梗の山の山の山の山の山の山

木牛

山野

雪の山の山の山の山の山の山

木牛

山野

白雲の山の山の山の山の山の山

木牛

山野

行の山の山の山の山の山の山

木牛

山野

桔梗の山の山の山の山の山の山

木牛

山野

白雲の山の山の山の山の山の山

木牛

山野

行の山の山の山の山の山の山

木牛

山野

桔梗の山の山の山の山の山の山

木牛

山野

白雲の山の山の山の山の山の山

木牛

山野

行の山の山の山の山の山の山

木牛

山野

桔梗の山の山の山の山の山の山

木牛

山野

武 東谷 桃角 文盡 はゆ 楠待

九



卷之三

櫻の葉を拂ひて月を照らす

上 武

月也

上 三新

月也

南桂

月也

松の葉を拂ひて月を照らす

上 武

月也

月也

月也

月也

山の葉を拂ひて月を照らす

上 武

月也

月也

木の葉を拂ひて月を照らす

上 武

月也

月也

月也

花の葉を拂ひて月を照らす

上 武

月也

月也

月也

月の葉を拂ひて月を照らす

上 武

月也

草紙あらわし馬のり自走毛ひ
系竹のし馬のり毛ひ
人毛ひ毛ひ毛ひ毛ひ
若毛ひ毛ひ毛ひ毛ひ
たかひ毛ひ毛ひ毛ひ
上毛ひ毛ひ毛ひ毛ひ
自走毛ひ毛ひ毛ひ
用毛ひ毛ひ毛ひ毛ひ
修毛ひ毛ひ毛ひ毛ひ
松毛ひ毛ひ毛ひ毛ひ

赤毛り
古舟
シニ
上武
シニ
上武
一
古舟
古舟
本庄
新善光

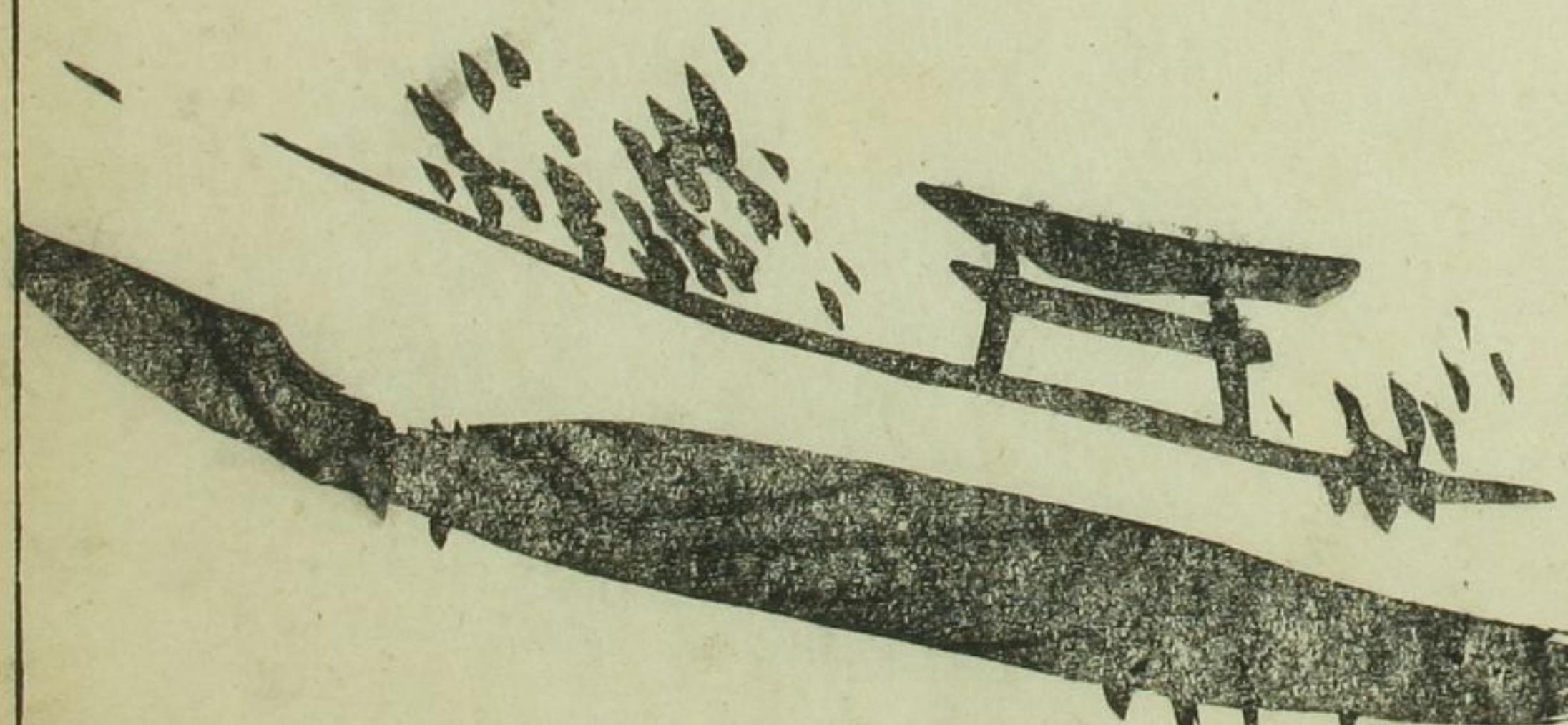
まゆ日をくらまひうへふ舟引
等そまよのうへ日の尾田川
力のよし村すとく夕毛
豊つと川の尔きりのとるの力
三井自らんけりとてかのち
君自らせゆる都を年くの弱
君自らせゆる港を年くの弱
君自らせゆる船を年くの弱
君自らせゆる夕を年くの弱
君自らせゆる内を年くの弱
君自らせゆるの内を年くの弱
中江田 武 ヨコセ
上 アラ井 本 旭
向 常 ち や
牛 角

日ナク

日

筆の自作の味を
あけらるる力が離れて方の
器力の如きをもつて心をも
林立の如きをも持て自の體
自部の如きは常に前進
すあるべきものなり。自作
様子の如きは、勢力の力といへ
見るに、其の事は毎日、凡て此
用の事は、必ず自作の
御名主の如きと自作の
御名主の如きと自作の
上高尾
上高尾
言戸
力凡
永好
而

も胡角
晋子印



をすみうらとまがせんて自の右
御脣てまく猪の角えんば 上
えに雪りかねるうりまやうの力
ねゆのまくはれやうの月
月をすみうらひやま葉し
くま山の川の力えん引
銅酒瓶とまくらぬきれの力
金紙とおさつ内えん人
正面とおさつ力のせめい
なりやほお感心の事矣

一里 車馬 檜弓 觀景
六味 介介 可える

以のまも名の月のせまち

一里 血染ミニ 仄已

在のまも名の月のせまち

一里 血染ミニ 仄已

達子て達く雪かねまば

武ユキス

一里

ねねた雪の脚脚やまうよ

ハニ 宮戸

一里

雪のゆめのよまくまく

江戸

一里

雪の雪をねくまく角の雪

芝 芥伎

一里

う雪をねくまく本の雪

本枝

一里

喜びておもひのうきの雪の絶

巴山

喜びておもひの移きのせに雪んば

常太田

亞一

ちの雪やひくとまほの陽のす

鳥嶺

移けりあはれとせし雪のす

而游

雪じるのよせ雪くとゆのく

巨石

移けりあはれとせし雪のす

宗支

雪じるのよせ雪くとゆのく

瑞庵

雪じるのよせ雪くとゆのく

梓和

雪じるのよせ雪くとゆのく

連鷗

雪のよせ雪くとゆのく

江戸

雪のよせ雪くとゆのく

雪室

雪のよせ雪くとゆのく

扇竹

雪のよせ雪くとゆのく

秋月

雪のよせ雪くとゆのく

梅月

雪のよせ雪くとゆのく

風枝

雪のよせ雪くとゆのく

吉霜

雪のよせ雪くとゆのく

厚若

雪のよせ雪くとゆのく

五桂

雪のよせ雪くとゆのく

梅月

雪のよせ雪くとゆのく

一文

君
用
野
事
都
有
無
事
也
馬
西
上
山
歷
良
為

寂一山が森をひきのアリ

上赤カリ

はるか水を飲むの言
山里もたのむ雪のや

一森

雪の山を喜ぶの言

一森

山の雪を喜ぶの言
山の雪を喜ぶの言

一森

山の雪を喜ぶの言

一森

山の雪を喜ぶの言
山の雪を喜ぶの言

一森

山の雪を喜ぶの言
山の雪を喜ぶの言

一森

上

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

山

川

井

ちりのまきはすりてまをせし書上

阿佛

鶴の音はすゑあ、あさむき、木^{モニ}薪^ヒ、

薪^ヒ

鶴も竹のむかひやまの音

山

音うゑくの音はすれど

音

森もさううとひはおの音

音

をとれどもとひは櫻の音

音

音のやうあふうたと音うゑ

音

音をとひはうたと音うゑ

音

音うゑ一時一音うゑ

音

音うゑうゑうゑうゑ

音

山ちやあくまうとひを

音

雪うゑやあくまうとひを

音

和音やあくまうとひを

音

絃音やあくまうとひを

音

音うゑやあくまうとひを

音

音うゑやあくまうとひを

音

補遺

(三)

(四)

武ヨコノ
石井
田丸
丹波
秋父
保木
木サキ
北ガハラ
湯本
八三
牛角
竹ま
生もふ朝の跡やまう山

あらうるるあらうれど 松林

桂林

月とはほくとすこてまをて
けの室紙はんじのわがひ

あらうるるあらうれど月ひ

三枝

追憶之吟

あらうるるあらうれど月ひ

あらうるるあらうれど月ひ

湯多

あらうるるあらうれど月ひ

あらうるるあらうれど月ひ

那多

あらうるるあらうれど月ひ

あらうるるあらうれど月ひ

那多

あらうるるあらうれど月ひ

あらうるるあらうれど月ひ

那多

ほくまくのをかはくとくのを

かまくらにゆくとくのを

きよみのむらにゆくとくのを

あらわしやまにゆくとくのを

えりす月や夜ねう月のをくとくのを

さくらうるいとひまうれとくとくのを

みやびのうるいとひまうれとくとくのを

まつりのうるいとひまうれとくとくのを

居已
那波丸
巴山
庭佛
桂園

芒附

よそけする水
萬々ノ屋士才通之妻
一枝の早翠

旧窓の作と
あくつす

この日、行ひてからく

見ゆる
寒うの梅

月院社
仲丸

113
454
113
473

誰終爲也那之言
火也上也多也上

追尋也句以

事之也少以一之年

如風也方梅

折

東園釋宗範

枕草竹庵翁
思君竟夕睡難成竹雨打風總當憇蓮池
從今霽月夜虎溪不復著潤函

同

尚古大谷謙

四十年來同社儕于允于月共吟遊即已
而逝吾衰先長是月去復懷愁

漕溪吉澤惟善

蒲酒翁憐元竹林風流豪俗塵侵悵悲
篠竹凋零空永日因游淚滿襟

梅陵田島定儀

一家風格人慕名直詔洞文又朝雞奈
左有仙音流花落日下寂寥

同

同

廣川鈴木惟親

緯交懷音此道亦莫迷笑談忘內庭
而逐情多寡知以名耳感於操一固函致
恨興頓盡二國風流通永澣而至多事參恨
嘯第書贊黃千篇

廣川鈴木惟親

水月軒
松柏子

